グループ討議3-A：看護スタッフの学術情報活用の自立支援

森岡まり子¹⁾，五十嵐菊美²⁾，佐山 暁子³⁾，武田 昭子⁴⁾，中島 陽之⁵⁾，橋井嘉枝子⁶⁾，樋口 豊美⁷⁾，平田 文子⁸⁾ (第二著者以降は五十音順)

心臓病センター榊原病院図書室¹⁾，東京女子医科大学図書館²⁾，東邦大学医学メディアセンター³⁾，刈谷豊田総合病院図書室⁴⁾，久留米大学医学図書館⁵⁾，鳥取大学医学図書館⁶⁾，防衛医科大学校図書館⁷⁾，県立広島大学三原学術情報センター図書館⁸⁾

I. はじめに

第14回医学図書館員基礎研修会のテーマは、「学術情報のマネジメント力を身につける」であり、図書館業務の研修をはじめ、「資料構築」「サービス」「情報リテラシー」のグループに分かれ、討議内容を発表した。

私たち「情報リテラシー」グループは、利用者にとって効果的な学術情報リテラシー教育を提供するにはどうすべきか、その提供自体が図書館員の自己満足に陥っていないか、またそうならない為に方策はないかということ念頭におき、大学図書館、医学図書館、病院図書室における多様な情報交換、そして解決に向けて討議を進行した。

II. テーマ選定の理由

医療の世界は止むことなく急速に進歩し続けており、医師、看護師を始め医療従事者はそれに対応していかなければならない。それに伴い医学図書館・病院図書室等の図書館員も利用者により良い情報やサービスを提供すべきであり、役割も大きいと言える。私たち図書館員に出来る事や実施している事を見直し、現状の疑問や問題点(1～8)を挙げていった。

- 1) ガイドンスの企画・広報等の工夫やホームページで利用案内を作成する為の留意点とは。
- 2) 文献検索の手段を追究したい。調査方法、利用者が満足するレファレンス方法とは。
- 3) 魅力的なオリエンテーションを行う為の進行方法とは。
- 4) 図書館を利用しやすく、必要な情報を手軽に入手す

る方策は。

- 5) 文献検索指導で何をどこまで伝えたらよいのか。
- 6) 年3回の利用者教育の実施にあたり利用教育のポイントを追及したい。
- 7) 検索スキルの習熟だけでなく、研究・教育・学習等様々な学術活動を日々行っている利用者の視点からみて有効な情報リテラシーサービスとは何か。
- 8) 担当職員不在時(時間外)の効果的な利用者教育の手段はないか。

上記の意見を出し合ううちに対象者を看護師に絞り、学術情報活用の自立支援を追及していくことになった。

各地の病院や看護師養成課程において、実務に加え看護研究を行い科学的・実証的根拠に基づいた(EBN=Evidence-Based Nursing)臨床看護の重要性が認識され、実践されている。しかしながら、情報収集能力には個人差があり、図書館員による情報リテラシー教育にも様々なものが求められている。学術情報の収集・活用の為に図書館員は、どのようなものをどこまで支援できるかを考えていった。

III. 討議内容

- 1) 看護研究を目的としている看護師に、図書館員は何を提供していけるのかを討議した。
・図書館のPR…最初の段階では、図書館で何が調べられるのか、どのように利用したら良いかという基本的な図書館の利用案内を行い、資料の配列をはじめ、OPACの使用法等を講習する。受身の図書館サービスではなく、図書館の存在や有効利用の為のアピールをする。

次のステップとして、研究目的に適したキーワードの選び方、資料の探し方、新聞記事の探し方、データベース(PubMed, 医中誌 Web, CINAHL, CiNii, J Dream II等)利用・操作方法等を説明する。1回のガ

¹⁾ Mariko MORIOKA : 〒700-0823 岡山県岡山市丸の内2丁目1番10号。Tel 086-225-7111 FAX 086-223-5256

²⁾ Kikumi IGARASHI, ³⁾ Satoko SAYAMA, ⁴⁾ Akiko TAKEDA,

⁵⁾ Hiroyuki NAKAZIMA, ⁶⁾ Kaeko HASHII, ⁷⁾ Toyomi HIGUCHI,

⁸⁾ Fumiko HIRATA (2007年9月14日 受理)

イダンスですべてを網羅せずに、使用方法の要点をまとめたプリント等を準備する等工夫を凝らしながら、何回にも分けて行くと成果が上がる。

ガイダンスの実施にあたっては利用者のニーズを把握することが重要であり、看護部、看護科教員等との連携が必要である。事例として、看護学生だけでなく、地域の看護師に講習会をし、医中誌 Web のガイダンス等を実施している。また、医学的・看護学的知識をもつ看護師のサポートを受けながら適切なシソーラスの選び方、操作実習を行っている図書館もある。

- ・データベースの利用方法をホームページに掲載…利用者が知りたい時に迅速に情報を提供していくことが重要と考え、その為の環境作りとしてインターネットのホームページを利用し、看護師向けの図書館の利用案内を載せる。
- ・パンフレットの作成（〇〇さんが文献を入手するまで→ストーリー仕立て）…文献を入手するまでの経緯をストーリー仕立てで紹介をするパンフレットを作成し、スムーズに文献入手出来るように支援する。
- ・e-Learning 教材の作成…利用者の都合の良い時間に学習が出来るという目的で、看護師向けの教材を作成し、オンライン上で閲覧出来るようにする。これを独自で実現するには経費がかかるので NPO 法人日本医学図書館協会（以下、医図協）等の大きな団体で作成していただけたら今後、図書館のサービスの幅も増えるという意見もでた。
- ・個々への対応…利用者個人へのレファレンスを通じて、個々の状況に合わせて利用者自身で文献を探せるようにサポートすることも重要である。
- ・ビデオオンデマンド…図書館でのデータベース利用講習会等の映像をビデオ撮影し、インターネットのホームページ上で見られるようにする。これは、利用者の都合のいい時間に学習することも出来、作成側も比較的容易に出来る。
- ・看護師用のデータベース利用マニュアルの作成…看護師用のデータベース利用マニュアルを図書館間でダウンロードして共有利用出来るというパスファインダーバンクのようなものがあれば便利である。
- ・ポータルサイトの紹介…有用なインターネットサイトの紹介も利用者の情報収集に役に立つ。例えば、医図協 [ほか] 協同企画の「からだところの情報センター (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/nlsic/index.html>)」等のサイトや無料電子ジャーナルのサイトの情報を利用者に提供する。

2) サービスを提供・支援するには、図書館員のスキルアップが必要になってくる。スキルアップをするにはどのようにしていけばよいのか討議をした。

- ・医図協等の様々な講習会に参加し、図書館・図書室の現状を見据える。他機関との情報交換で情報収集を心がけ、図書館間のネットワークを広げる。
- ・館内での勉強会を定期的に開催し、館員の意識の統一、情報の共有化、意思疎通をはかり、館員のレベルアップをする。
- ・レファレンスの共有サイトを作り、事例が検索出来ることにより図書館員のレベルアップが図られる。独自の図書館だけでなく各図書館間で協力し合い事例を収集することにより幅広く事例を知ることが出来、今後のレファレンスに役立てられる。これは規模が大きくなるので、国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」の利用をすることや、医図協のホームページ上で、レファレンス事例が登録出来る共有サイトを立ち上げて頂けると便利であるという意見もでた。
- ・図書館の新着資料に注目することにより、最新の医学の知識・キーワードを知ることが出来、レファレンスや情報リテラシー教育にも役立てられる。
- ・看護雑誌の表紙・特集記事・目次にも目を通すことで、トピックの把握に役に立つ。
- ・資料担当者とレファレンス担当者（カウンター業務担当者）との情報交換により、直接利用者と接する機会が多い担当者は、新着雑誌・図書のことや話題のトピックを知り、利用者とのレファレンスや講習会に役立つ。
- ・専門的な雑誌や図書だけでなく新聞等で社会の動向を把握し、社会と看護、医療領域を結び付けられることが望ましい。
- ・レファレンスを受けた時、疑問を残さず解決をしていくことがスキルアップにつながる。
- ・統計・白書・年鑑の使用法をマスターすることにより、数字などで動向がわかり、新たな利用者教育へと結びつくと考えられる。

IV. まとめ

情報化が進み、Web の普及等により、図書館に足を運ばなくても必要な情報が入手出来、ID とパスワードがあれば手軽にデータベース検索が出来るようになってきた。このような状況の中で図書館員の役割は、看護師のニーズを知り、適切なサポートをしていくことだと考える。学術情報の自立支援を行うには、看護師と図書館員がお互いに協力することであり、また図書館員は、常

に看護師が必要とする情報をキャッチする感性とそれらの情報を提供出来る準備を怠ってはならない。看護分野は、医学・看護学だけでなく心理学、社会学等を含む広い分野であり、図書館員も情報提供に幅を持たせる努力が必要である。図書館の有効利用の促進を願い私たちは、「まずは行動ーニーズがニーズを呼ぶ」「問題にぶつかった時がスキルアップのチャンスー看護師さん一緒にがんばりましょうー」という標語にまとめた。まずは、潜在的利用者を含めサービス対象者に図書館を認識してもらえるようはたらきかけることから始め、図書館を一度利用してもらうことから芋づる式に利用者のニーズを引き

出していこうという戦略である。そして、困難なニーズに直面した時には逃げ出さず、利用者とともに学んでいくという意識をもち初心を忘れないことが、図書館サービス・図書館員の技能向上の秘訣になるのではと考えている。

最後にこの研修を終え、自己を見つめる為、スキルを磨く為にも全国の図書館業務に携わる方々とのネットワークこそ、医学図書館員としての誇りと向上心を保つ秘訣だと確信した。短い期間だが、一つのテーマに沿い討議し合える機会を設けて頂いた医図協と当メンバーに感謝したい。

グループ討議3-B：情報リテラシーの向上を目指して

富永 未来¹⁾, 吉村 祐志²⁾, 尾曲 久美子³⁾, 高橋 眞由美⁴⁾, 谷本 祥子⁵⁾, 豊田 晴海⁶⁾, 中村 敦美⁷⁾
原 由加子⁸⁾, 山西 直子⁹⁾

名古屋市立大学総合情報センター川澄分館¹⁾, 大鵬薬品工業株式会社徳島研究センター徳島研究管理室²⁾, 東大阪市立総合病院図書室³⁾, 島根県立中央病院図書室⁴⁾, 旭川医科大学図書館⁵⁾, 社会福祉法人恩賜財団済生会西条病院⁶⁾, 川崎医療短期大学附属図書館⁷⁾, 関西医科大学附属看護専門学校⁸⁾, 首都大学東京図書情報センター荒川館⁹⁾

I. はじめに

「第14回医学図書館員基礎研修会」が、平成19年8月1～3日にかけて岡山大学にて開催された。本稿は、グループ3-Bにて討論された「情報リテラシー（利用教育・情報検索）」の結果報告である。

グループは、大学図書館・病院内図書館・患者図書室・企業の研究室の従事者や、看護教員など、様々な職種の参加者によって構成されており、互いの職場の現状や感じていることを話し合った。その結果、それぞれ立場は異なるものの、利用教育・情報検索において共通した問題点や疑問点が存在することがわかった。そこでそれらの点について意見を交換し合い、問題解決に向けた今後の課題を明確にした。

II. 討議内容

1. 情報検索における利用者の現状

館種別に、利用者が情報検索をする場合によく発生する事例をまとめた。

1) 大学図書館

- ・自館の書架のブラウジングや、OPAC 検索のみで蔵書の有無を判断しがちである。
- ・データベースで文献を探し出しても、貸借や複写申込の知識が無く、文献入手に至らない。

2) 病院内・企業内図書館

- ・利用者が早急に資料を必要としたり、多忙である場合が多く、図書館員に情報検索の代行を依頼する。
- ・情報検索のニーズはあるが、利用者に対して検索方法や文献入手についての教育の場が設けられていない。

3) 患者図書室

- ・患者図書室を訪れる利用者の事情や病状、求める情報はそれぞれ異なる。医療の専門家ではない図書館員は、偏った情報や意見を利用者に提供しないように気をつ

¹⁾ Miki TOMINAGA：〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地。

²⁾ Yuji YOSHIMURA, ³⁾ Kumiko OMAGARI,

⁴⁾ Mayumi TAKAHASHI, ⁵⁾ Shoko TANIMOTO,

⁶⁾ Harumi TOYOTA, ⁷⁾ Atsumi NAKAMURA, ⁸⁾ Yukako HARA,

⁹⁾ Naoko YAMANISHI (2007年9月18日 受理)